

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Calculating stylistic differences between
synonymous adverbs : Taking Mattaku, Zenzen,
Sukoshimo, Chittomo as examples

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 劉, 時珍, Liu, Shizhen メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002573

類義副詞の文体を測る試み

—「まったく」・「ぜんぜん」・「すこしも」・「ちっとも」を例に—

劉時珍（東洋大学非常勤）[†]

Calculating stylistic differences between synonymous adverbs: Taking *Mattaku*, *Zenzen*, *Sukoshimo*, *Chittomo* as examples

Liu Shizhen (Toyo University)

要旨

本発表はコーパスを用いて副詞の語彙レベルの文体を測る方法を試みるものである。4つの類義副詞、「まったく」「ぜんぜん」「すこしも」「ちっとも」を対象に、8つの形態的指標に基づき、「硬度」と「あらたまり」という2次元的な尺度を交差させることによって類義副詞の文体的な位置づけを明らかにした。

2次元に分けた結果、4つの副詞がそれぞれの象限に収まった。「まったく」は硬度が高く、あらたまり度も高い。「ぜんぜん」は硬度はやや高いが、あらたまり度が低い。「すこしも」は硬度は低い、あらたまり度が高い。そして、「ちっとも」は硬度も低く、あらたまり度も低いという結果である。一方、「硬度」という軸から見れば、「まったく」と「ぜんぜん」は近く、「すこしも」と「ちっとも」は似ているが、「あらたまり度」から見れば、「まったく」と「すこしも」は近く、「ぜんぜん」と「ちっとも」の文体がより似ていることが覗えた。「まったく」と「ちっとも」は最も距離が離れていることが分かった。

1. 副詞の文体に関する問題意識

副詞という品詞において、文体差が大きいという指摘は多い（石黒（2004）など）。日本語母語話者の直感に照らせば確かにその通りであるが、日本語学習者の場合、その判断に迷うことが多いのが現実である。大量の言語データを用い、文体差を客観的に測定する尺度を考えることはできないのだろうか。

また、文体差は、書き言葉的、話し言葉的という一次元的な尺度が設定されることが多い（井上（2009）など）が、ある面からは書き言葉的に、別の面からは話し言葉的に見える語がある。このような語はどう考えたらよいのだろうか。

こうした二つの疑問に答えるために、本章ではコーパスを用いた文体尺度を設定する試みを提案する。「まったく」「ぜんぜん」「すこしも」「ちっとも」という4つの副詞を対象に、前者の疑問については、形態的な指標に基づく尺度を提示することで、後者の疑問については、「硬さ」⇔「軟らかさ」、「あらたまり」⇔「くだけ」という二つの軸を設定して交差させ、コレスポネンス分析の結果図の4つの象限に副詞を位置づけることで、その解決を目指したい。

2. 文体を測る文法項目

副詞の文体に関する先行研究は宮島（1977）、井上（2009）、渡辺（2010）などが挙げられる。本稿では先行研究の説を踏まえた上で、8つの形態的な指標を抽出し検証を行う。

[†] liusz77@hotmail.com

2.1 共起する漢語述語の割合

副詞は述語を修飾するので、対応する述語と緊密な関係を持っている。述語の中には和語もあれば漢語もある。一般に、漢語は文体が硬いと言われているので、副詞の文体を見るために、漢語述語と和語述語の割合を算出する。

表1 漢語述語の出現率

	ぜんぜん 否定 (693)	まったく 否定 (558)	すこしも 否定 (982)	ちっとも 否定 (844)
漢語	65 (10.5%)	78 (14.0%)	128 (13.0%)	87 (10.3%)
和語	622	477	853	751
その他	6	3	1	6
計	693	558	982	844

この表1から「まったく」の漢語述語率が高いことがわかる。ちなみに、「まったく」の述語の目的語にも漢語が多いことを付け加えたい。「すこしも」の漢語が多いことも目につくが、これらは、実は名詞ではなく、漢語形容動詞がほとんどであることを一言言い添えたい。「ちっとも」の中にも「すこしも」と似た現象がある。

2.2 連体修飾節内での出現率

連体修飾節は複雑な文構造に現れやすく、硬くて難しい印象を与える。ここでは、そうした連体修飾節に収まる副詞を用いて副詞の硬さを測る。

表2 連体修飾節内の出現率

	ぜんぜん 否定 (693)	まったく 否定 (558)	すこしも 否定 (982)	ちっとも 否定 (844)
連体修飾節	72 (10.4%)	54 (9.7%)	54 (5.5%)	65 (7.7%)
その他	621	504	928	779
計	693	558	982	844

表2から、連体修飾節の全数に対する比率で言うと、「ぜんぜん」は「まったく」よりわずかに高く、「すこしも」は連体修飾節が最も少ないことがわかる。

2.3 「ず・なく」の出現率

文章用語という硬い印象を与える「ず・なく」の使用頻度は表3のようになる。

表3 連用形「ず・なく」の出現率

	ぜんぜん 否定 (693)	まったく 否定 (558)	すこしも 否定 (982)	ちっとも 否定 (844)
連用形「ず・なく」	22 (41.5%)	45 (95.7%)	189 (93.1%)	30 (62.5%)
連用形「ないで・なくて」	31	2	14	18
計	53	47	203	48

表3の結果を見ると、「すこしも」は「ず・なく」形がほかの3つの副詞より最もよく使

われることが分かった。これは「すこしも」の文体が古いためとも考えられる。次に、比率から見ると、「まったく」の「ず・なく」形との共起率が高く、「すこしも」もほぼ同じく高い。「ちっとも」は3番目で、「ぜんぜん」だけは「ず・なく」形より「ないで・なくて」形の方が多い。この項目では「ぜんぜん」が軟らかいことが分かる。

2.4 文末のデアル体の割合

文末表現は文体的特徴を測るのに適している。硬度を測る場合、硬いとされるデアル体の頻度を数えるのが適切である。

表4 デアル体の使用

	ぜんぜん 否定 (693)	まったく 否定 (558)	すこしも 否定 (982)	ちっとも 否定 (844)
デアル体	6 (0.9%)	31 (5.56%)	52 (5.3%)	23 (2.7%)
その他	687	527	930	821
計	693	558	982	844

表4から、デアル体の使用については、比率で換算すれば「まったく」はわずかだが「すこしも」より高い。それと対照的に、「ぜんぜん」と「ちっとも」の文末のデアル体の比率が少ないという結果が得られた。

2.5 「文学」の会話文内の出現率

「文学」に限定して考えた場合、どの副詞が会話文によく出てくるか、どの副詞が地の文によく出てくるかは文体的特徴が現れる。

以下、4つの副詞の例文を数量的に、会話文と地の文にそれぞれの出現数を集計した。結果は表5の通りである。

表5 文学作品における出現数

	ぜんぜん 否定 (693)	まったく 否定 (558)	すこしも 否定 (982)	ちっとも 否定 (844)
会話文	58 (40.8%)	18 (15.1%)	60 (11.5%)	177 (45.5%)
地の文	84	101	463	212
計	142	119	523	389

表5から、文学作品における会話文と地の文の使用状況を見ると、「すこしも」は地の文によく使われ、「ちっとも」は会話文によく使われることがわかる。

2.6 文末のデス・マス体の割合

2.4では文末のデアル体を調べた。この小節で扱うもう一つの文末表現であるデス・マス体（「でございます」も含む）は対人関係における改まりを表す。そこで、デス・マス体を集計し、それが少ないほど、「くだけ度」が高いと考えた。

表6 デス・マス体の使用

	ぜんぜん 否定 (693)	まったく 否定 (558)	すこしも 否定 (982)	ちっとも 否定 (844)
デス・マス体	268 (38.7%)	223 (40.0%)	145 (14.8%)	219 (26.0%)
その他	425	335	837	625
計	693	558	982	844

表6の結果からわかるように、比率から「まったく」はデス・マス体が全体の40%を占めているのに対して、「ぜんぜん」は全体の約3分の1強で、「ちっとも」は三番目の26%で、「すこしも」の文末のデス・マス体は最も少ないことがわかった。

2.7 非標準形の割合

副詞の文に述語や文末表現が音の脱落や変化によって生じる口頭語化した形を非標準形と呼ぶ。ここでは、4つの副詞を含む1つの文にその非標準形が複数個使われる場合でも1つの非標準形の文として数え、集計した。

表7 非標準形の文数

	ぜんぜん 否定 (693)	まったく 否定 (558)	すこしも 否定 (982)	ちっとも 否定 (844)
非標準形	156 (22.5%)	7 (1.3%)	36 (3.7%)	186 (22.0%)
その他	537	551	946	658
計	693	558	982	844

表7から、非標準形文の使用率の結果を見ると、比率から「ぜんぜん」は「ちっとも」より多いことが分かる。ただし、くだけている度合いは「ちっとも」が高いという見えづらい真実も存在していることを言い添えたい。それに対して、「すこしも」は非標準形の文が少なく、「まったく」はさらに少ないという結果になっている。

2.8 文末の終助詞の出現率

文末表現のもう一つ、大きな特徴として、話し言葉に専ら現れ、対人的な働きかけ意識の強い終助詞「よ」「ね」「わ」「ぞ」「の」などがある。これらが多いと「くだけ度」が高いと考えられる。

表8 終助詞の出現率

	ぜんぜん 否定 (693)	まったく 否定 (558)	すこしも 否定 (982)	ちっとも 否定 (844)
終助詞	107 (15.4%)	27 (4.8%)	49 (5.0%)	141 (16.7%)
その他	586	531	933	703
計	693	558	982	844

表8の結果からわかるように、「ぜんぜん」と「ちっとも」では終助詞を伴った文の比率が同じぐらい高く、それに対して、「まったく」と「すこしも」の文末には終助詞が少ないことがわかった。

3. 結果のまとめ

8つの指標を用い、副詞「まったく」「ぜんぜん」「すこしも」「ちっとも」の文体的特徴を測定した。今回の調査では、文法項目を得点化し、その結果は表9にまとめて一覧表にし、カイ二乗検定を行った結果、ほぼ全ての項目において有意差が出た。

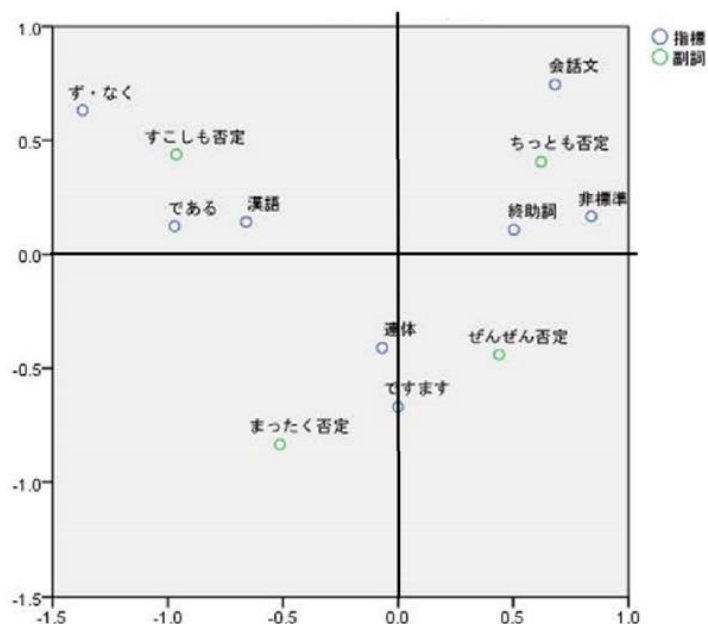
表9 文体特徴の結果一覧表

	ぜんぜん 否定	まったく 否定	すこしも 否定	ちっとも 否定
漢語	65▽	78▲	128▲	87▽
連体	72	54▲	54	65▽
である体	6▽	31▲	52▲	23▽
連用ず、なく形	22▽	45	189▲	30▽
です・ます体	268▲	223▲	145▽	219▽
非標準形	156▲	7▽	36▽	186▲
終助詞	107▲	27▽	49▽	141▲
会話文	58▽	18▽	60▽	177▲
否定全体	693	558	982	837

$\chi^2(21) = 746.09$ 、 $p < .01$ 、Cramer's $V = 0.294$

ここで、表9の結果に基づき、コレスポンデンス分析を行った結果は図1のようになる。

図1 4つの副詞と文体的な特徴¹



コレスポンデンス分析の結果の図1の見方としては、まず縦線の「0.0」の地点と横線の「0.0」の地点からそれぞれ直線を引く。その結果、4象限が作られ、横の軸を次元1、縦の軸を次元2と呼ぶ。そして、4つの副詞の位置、距離から判断して、横の次元1に沿って、4つの副詞を順番に「すこしも否定」、「まったく否定」、「ぜんぜん否定」はやや「ちっとも

¹ 寄与率97.2%

否定」の前にあるという結果が見える。次に、縦の次元 2 に沿って副詞を見ると、下から「まったく否定」から「ぜんぜん否定」へ、「ちっとも否定」と「すこしも否定」はほぼ同じ高さになっている。それで、横の次元 1 は左から右へ「あらたまり度⇔くだけた度」、次元 2 は下から上へ「硬度⇔軟度」と解釈するのが妥当だ²と考えられる。

ここで重要なのは、「まったく」と「すこしも」の位置である。「まったく」は硬くて、あらたまった文章語的な副詞であるが、「すこしも」は硬くはないが、あらたまった副詞なのである。「すこしも」は「ある面からは書き言葉的に、別の面からは話し言葉的に見える語がある」というまさにそれに相当するものである。一方、「ぜんぜん」「ちっとも」は両方の面から見て話し言葉的であることが以上の結果に反映されている。

4. 「硬度」軸と「くだけ度」軸を交差して副詞の文体の論述

本稿ではコーパスを用い、否定とも呼応する副詞の類義表現の文体上の特徴を調べた。

その結果、4つの副詞のうち、図1の横の次元1(左から右へ)「あらたまり度⇔くだけた度」では、「すこしも」はあらたまっており、「ちっとも」はくだけているペアとして棲み分けているように思われる。「ぜんぜん」もややくだけており、「まったく」はややあらたまっていることがわかる。

一方、次元2(下から上へ)「硬度⇔軟度」では「まったく」が4つの中で最も硬いことが分かる。「ぜんぜん」は二番目でやや硬いと思われる。「すこしも」も「ちっとも」も硬くない。「すこしも」は「あらたまっている」のであり、「ちっとも」は「くだけている」のである。

このことは、コーパスを用いて、8つの形態的指標に基づき統計的に検証したこと、及び、「硬度」と「くだけ度」という二次元的な尺度を設けたことによって初めて明らかになったものである。

今回は「ぜんぜん」類の4つの副詞を対象に、調査を行ったが、今後はこの同じ8つの指標で、他の副詞を測り、検証していきたい。

謝 辞

本稿は一橋大学に提出した博士論文の一部です。博士論文は何回も難航し、指導教員石黒先生の導きがなければと突破口が見つからずじまいになってしまっていたことを存じており、心から感謝しております。また、副指導教員山崎先生に統計の方法、考え方を教えていただき、ようやく客観的な形になったことも心からお礼を申し上げます。そして、雛形の段階から研究室の仲間、ゼミの仲間にもいつも話を聞いていただき、方法などの洗練ができたことについても、感謝の気持ちがいっぱいです。

文 献

- 石黒圭(2004)「中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴」『一橋大学留学生センター紀要』7、pp.3-13
 井上次夫(2009)「論説文における語の文体の適切性について」『日本語教育』141、pp.57-67
 宮島達夫(1977)「単語の文体的特徴」『国語学と国語史—松村明教授還暦記念』pp.871-903、明治書院
 渡辺史央(2010)「論理的文章における程度副詞について」『ニダバ』39、pp.106-115

関連 URL

コーパス検索アプリケーション『中納言』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

² BCCWJ の 2009 年版のデータを用い、8つの文法項目で測ったことがあり、同じ結果の図が得られた。